《論文》

神の國は斯くのごとき者の國なり
――公立小学校教員としての歩み（その４）――

佐々木　正

１　はじめに

ポルト・アレグレ日本人補習校の勤務も３年目となり、帰国を迎える年となりました。

幸いにもこの小さな補習校に継続して教員が派遣されることも決まり、ほっとしました。日本から最も遠く離れた地で学ぶ子どもたちのために、また、さらに補習校が発展することを期待しました。

同じころ、私の帰国後の勤務先の連絡がありました。それはブラジルでの３年間、常に心の支えになっていた在籍校に戻ることができるという連絡でした。帰国後の勤務先はだれもが在籍校に戻れるわけではありませんでした。派遣時知り合いになり家族ぐるみでおつきあいのあった派遣教員の方は、帰国後の勤務先は在籍の小学校ではないことに加え、中学校になったとの連絡を受け、状況の変化に対するご苦労を想像したものでした。

帰国後初出勤の日、職員室で３年ぶりに出会う先生達と気持ちの中では握手をしている自分がいました。日本では実際に手を差し出して握手する習慣は当時ほとんどありません。このように進んで人と関わろうとする気持ちは、以前の私にはあまりありませんでしたので、この気持ちの変化には自分でも驚きました。３年間、ブラジルに住む人々のおかげで変われたのかもしれません。ブラジルでは週日の朝６時台のバスは勤めに行く人々で満員です。貧富の差は日本とは比べ物にならないものがありました。そんな中で、「家族や親族、親戚の人々、友人、隣人を大切にし、顔見知り

の人でもそうでなくても目と目を合わせて微笑み合う」、これこそが人生を楽しむことだということをブラジルに住む人々が私に気づかせてくれました。

２　Ｓ小学校での勤務

（１）学級文化づくり

子どもたちにとって学級は学校生活の大部分をそこで過ごす大事な場所です。すべての子どもたちにとって、居心地のよい学級づくりは学習指導以上に大切なものであると日ごろから気づかされてきました。そのために、学級における文化づくりは大事な担任の仕事と考えるようになりました。

高学年担任となったある年に、百人一首の暗唱を学級で取り組もうと考えました。暗唱は分校、特別支援学級、補習校の教員時代、日記指導、作文指導とともに重視してきた学びの一つです。中でも詩の暗唱を大事にした理由は、洗練された短い言葉が無限の広がりを内包し、一人ひとりの心に直接訴える力を持つことを経験させたかったからです。詩と出合い、そこから生まれる感情は自由であり、一人ひとり違っていることは当たり前であることを前提とした学級をめざしました。

このような指導を始めようと思い立ったのには二つの理由がありました。

一つ目は聖書の言葉、聖句暗唱の経験にあります。私が会員であった教会はカルヴァン主義の流れをくむ福音主義の教会でした。そこでは聖書の言葉を受け止め、人に伝えることを重視していました。そのため聖書の言葉の暗唱が勧められました。私は立教大学生時代に聖書の話を伝える土曜学校で教師として奉仕していました。そこでも、聖書の話の後、聖句と関連した絵が描かれている小さなカードを配り暗唱を勧めました。私が暗唱している詩編第121編は、これまで私を支え導く聖句となっています。

二つ目は教育実習で出会った一人の教師の授業です。このＨ先生は児童詩の作家でもあり、その一つ「かぼちゃのつるが」という詩は教科書に

も掲載されていました。教育実習の前半は実習校の先生方の授業を参観させていただくことが計画されていました。その際、国語の授業を参観させていただいたのがＨ先生の詩の授業でした。

教室には心地よい緊張感がみなぎっていました。先生の言葉を合図にして学級全体で詩の暗唱が始まりました。温かな声で、説得力のある美しい日本語が教室空間を包んでいました。詩の世界にどっぷりと浸っている心地よい子どもたちの声とリズムが教室を満たしていました。途中言葉少なにＨ先生の声が加わります。様々な読み方、一人ひとりの違いを超えて共に唱える詩の美しさが広がり、深い感動を覚えました。詩という言葉の芸術の力に深く気づかされた経験でした。

これらのことから、詩の暗唱を自らの教育実践の中で取り入れ続けて現在に至ります。校長として話す月曜朝礼ではときおり詩の紹介もし、暗唱を勧めるように心がけました。

（２）大塚ろう学校との交流

①　クラブ活動

Ｓ小学校ではお隣にあるろう学校との交流を長年続けていました。新年度になると必ず両校の全教員が一堂に会して、自己紹介をし合い、具体的な交流の内容について打ち合わせを行いました。クラブ活動はすべて合同で行い、二つの学校がまるで一つの学校であるかのように活動していました。活動のための教室や校庭なども２校分使えますので、活動の幅も広げることができました。子どもたちも何の違和感もなくクラブ活動はお隣の学校の子どもたちと一緒にできるものと考えていました。

私はブラジルから帰国後、ずっとサッカークラブの担当をしていました。そこには当然のようにサッカー好きの子どもたちが両校から集まり、週１回の活動を楽しみました。Ｓ小学校の校庭は手狭なため子どもたちがサッカーをするときは、全力でキックしないように注意しなければなりませんでしたので、活動場所は広い土のグランドのろう学校で行いました。活動

時間の初めに全員でのウォーミングアップを兼ねて小グループでの練習や全員が円形になり全力でボールを蹴り合いました。後半は紅白に分かれての練習試合を楽しみました。技能的な面では年によって、ろう学校の子どもたちの方が上だったりして、全く二つの学校の子どもの違いはありませんでした。

子どもたちは作戦を練って了解し合う時には、口を大きく開けて身振り手振りで伝えていました。私はこの体験を大変貴重なものと考え、あえてろう学校の子どもたちのしょうがいについて子どもにくわしく話しませんでした。2校の子どもたちを区別することがないようにしました。元来、子どもたちは鋭い感受性とケアの心、特に弱さに対しては大変敏感です。ろう学校の子どもたちの巧みなプレーに対して素直に大きな拍手を送り、「ナイス」と普段より大きな声と手振りで伝える姿から、共につながり合う子どもたちを信じることが大切であることに改めて気づかされました。

②　音楽会

ろう学校との交流の中で昨日のことのように心に深く刻まれた行事がありました。それは、2年生を担任していたとき招待されたろう学校の音楽会での子どもたちの姿です。特別支援学級を担任していた私は、しょうがいのある子どもが音楽とかかわる教育的意義の大きさを感じていました。子どもたちはリズムに乗って手足を動かすだけで笑顔になります。手と手を取って音楽に合わせて体を動かせばそのうちにフォークダンスのように、自然と人の動きをまねして自分も動こうとしたりします。しかし、聞くことにしょうがいがある子どもたちにとって音楽とはどんなものなのかわかりませんでした。しかも、2年生の子どもたちがろう学校の子どもたちのこと、しょうがいのことをどれだけ理解できるのだろうかと不安でした。ろう学校の子どもたちの保護者の方々がいらしている中、まだまだ幼さの残る2年生の子どもたちが、笑ったり、指をさしたりといった礼を失する行動をとったりしたら本当に申し訳ないという心配がありました。

私も参加は初めてで、どんな音楽会なのだろうか、担任している子どもたちはどんな受け止め方をするのだろうかといった思いを抱きながら学校を出ました。当日、私たちが導かれたろう学校の講堂では、すでに音楽会が開かれていました。他の小学校と変わったことは何もありません。

子どもたちの演奏する楽器から音やリズムが生まれています。しょうがいの程度に応じた指導をされていたのでしょう。先生が目立たぬように子どもたちの後ろでサポートしている姿があるだけでした。見守っているだけのときもありましたし、背中を軽くリズムに合わせてたたいてあげていることもありました。どれだけ練習したのかはわかりませんが、子どもたちはみな伸び伸びと体を動かしリズムを取りながら、わずかに残された聞く力を最大限に活用しながら合奏を楽しんでいました。

その姿をじっと見ている２年生の子どもたちは、全員がこれ以上ないというほどの聞き上手でした。一言も無駄な話をする子はいません。瞳を輝かせて、聞くことにしょうがいのある子どもたちが演奏する様子を、まっすぐに見つめながら音楽に聴き入っていました。一曲終わるごとの大きな拍手と笑顔は、体の内側から湧き出てくるような温かさを感じさせるものでした。ろう学校の子どもたち、聞くことにしょうがいのある子どもたちが奏でる音楽から送られてくる何かを、子どもたち全員がしっかりと受け止めているような感覚を抱き、両校の子どもたちのすばらしさ、「神の國は斯くのごとき者の國なり」と呼ばれた子どもたちの姿に感激しました。弱さで人と人とはつながるという聖書からの学びを思い起こしました。そのもっとも重要な真理の一つを、子どもたちはいつも私に教え続けてくれているのです。

退場の時間になり私は名残惜しそうな子どもたちとともに学校に戻りました。

３　学校管理職

（1）管理職への誘い

ブラジルから豊島区の小学校に帰りしばらくして、校長のＴ先生から「佐々木さんもそろそろだね。」という言葉をかけられました。初めは何のことだかわかりませんでしたが、話を伺っているうちに管理職試験の準備をしてみてはどうかという意味であることがわかりました。当時私は全くそのようなことは考えていませんでした。校長からの話ですから、すぐにお断りするわけにはいきません。ブラジルの補習校では校長としての立場で仕事を行い、対外的な場面では校長と紹介されていました。補習校ではただ一人の派遣教員としてそうせざるを得なかったのですが、日常的には子どもたちの指導を行っていましたし、3年間の任務を終え帰国後は一教師として再び子どもたちの指導に専念できることを楽しみにしていました。

校長は、私の気持ちを理解してくださったうえで、次の世代の教員を育てる責任を考える年齢になってきているのではないかとおっしゃったのです。そして、管理職試験に合格するためではなく、自分の教員としての視野を広げるためにも研修に参加してはどうかと助言してくださいました。校長先生のこの言葉は私に、管理職というものについて考えるよいきっかけを与えてくださいました。

（2） 校長との出合い

学校で一教員として仕事を進める中では、管理職の存在を意識することはほとんどなかったように思います。校長、教頭といった管理職と話す機会もほとんどなく、教員としての仕事を覚え何とかこなせるようになるまでの間は、学年主任の先生、学年の先輩教員が直接の上司といった意識で仕事をしていました。当時は新任研修などはあまり多くなく、年に数回学校を離れて講義中心の研修会に参加する程度でした。教師は着任してすぐに先生と呼ばれ、他の先輩教員と内容的には同じ仕事をしなければなりません。頼りになるのは学年主任の先生の存在であり、多くの指導をいただ

き、様々なことを学ばせていただきました。おそらく数知れないほどのご迷惑をおかけしてきたことと思います。

同時に、直接のご指導ではなくても、それぞれの校長先生方の教育者としての豊かな経験、深い洞察力、大きな包容力は未熟な私を支え、教師としての将来の指針を示してくださいました。

①　初めての勤務

初任者として勤務した北区の小学校のＭ校長は図工教育の専門家でした。子どもたち一人ひとりにクロッキー帳をもたせ、毎朝全校でクロッキーに取り組みました。絵がうまくなるというような近視眼的な目的ではなく、何事もしっかり注視することの価値を子どもたちと共に、私たち教員にも伝えてくださったのだと思っています。威厳があり、ときには教員を厳しく指導してくださる校長先生でした。

時がたつにつれ、学校における自分の役割なども意識できるようになり、教師として将来どう歩むかなどについて、また、異動に関する相談などが必要になったりすると管理職の先生と話す機会が増えていきました。私の場合はへき地校への希望があり、他県を受験するために２年目での退職の話をしたのが始めでした。いくつかのへき地小規模校のある県の採用試験受験について夏休み前に管理職の先生に話しました。幸い校長は私の希望を理解してくださり、応援の言葉をいただきました。私は試験に合格し、尊敬する学年主任のＡ先生と出会えた北区の学校から異動することになりました。

②　千葉県での分校勤務

教員生活３年目、千葉市立Ｓ小学校Ｔ分校でのへき地小規模校勤務が決まりました。事前の打ち合わせでお会いしたＨ校長は大変穏やかな人柄で、東京から異動してくる私をとても歓迎してくださいました。住居について尋ねられ、まだ決めていないことを伝えると、初めてお会いしたにも

かかわらず、話が終わるとすぐ知り合いの不動産屋さんまで連れて行ってくださり、事情を説明してくださったおかげで、その日そこで借りる家を決めることができました。

分校には常時勤務しているのは4人の担任だけでした。始業式や終業式などの特別な時だけ、本校で勤務している管理職の先生が来校してくださいました。6年間の私の勤務期間にH校長は異動され、N校長が着任されました。N校長もさらに穏やかな方でした。休みの日に農業も営まれている方で、朴訥とした誠実な人柄は、まだ経験の浅い私から分校の子どもたちをしっかりと守っていかなければ、という責任感を引き出していただきました。分校主任のもと、教員の結束と伸び伸びと挑戦を続けることができたのは、離れた本校で常に分校の子どもたちや私たちのことを気にかけながら、穏やかに見守ってくださったお二人の校長のおかげでした。信じて任されているという実感が教師を育てるのだということを、お二人との出会いを通して教えていただきました。

③　再び東京都での勤務

様々なことを学びたいとの思いから、6年間の分校教師生活から再度東京都の採用試験を受験しました。三度目の採用試験後、東京都の文京区立R小学校特別支援学級勤務となりました。R小学校のU校長は、算数指導の大家として著名な方でした。普段は学校の責任者としての風格を備え、どのようなことが起こっても泰然自若としていましたが、特別支援学級の子どもたちに対しては常に笑顔を絶やさず積極的に触れ合ってくださいました。特別支援学級は校長室と少し離れた場所にあり顔を合わせることはあまりありませんでした。しかし、ある日U校長が今でも忘れられない話をしてくださいました。「この子どもたちの母親は、みんな一度は子どもと一緒に命を絶とうと考えたことでしょう。」と独り言のようにおっしゃったのです。子どもたちの送り迎えをするために、私が毎日顔を合わせていた母親は皆さん笑顔で明るい方々でした。しかし、深い洞察力と数

多くの経験から発せられたＵ校長の言葉が、深く胸に刺さりました。教師生活10年目になろうとしていた私にとって、改めて教師という仕事の怖さと大切さ、自らの未熟さなどに深く、強く気づかされた言葉でした。

豊島区立Ｓ小学校への異動で出会ったＫ校長は私のそれまでの経歴を見て興味をもって話を聞いてくださいました。あるとき毎週月曜日にしてくださる子どもたちへの話は３分以内と決め、原稿を書いていると伺いました。私も校長となったときそのようにしようと思い取り組んだのですが、これがなかなか容易ではないことに気づかされました。週に一度の校長の話を考えると、ついあれもこれも話したいという思いがわいてきてしまうのです。休み明けの月曜日、寒い日も暑い日も朝校庭に集められ校長の話を聞かされる子どもたちのことをまず考える姿勢に感銘を受けました。

２年目にはＩ校長が着任されました。お会いしてからの日も浅い校長に海外教育施設への派遣教員希望を話す際は、学校での役割が果たせなくなり、申し訳ない気持ちもあったのですが、そんな心配の必要はありませんでした。考え方が柔軟なうえたいへん視野が広く、私の思いを快く受け止めてくださいました。校長からの豊島区への推薦書をいただき、それ以降の東京都、国の選考も頑張るようにとの言葉をいただき大変心強かったことを覚えています。

その後、選考に合格し、派遣教員名簿に登載され、派遣先を校長から知らされました。「佐々木さん、派遣先はポルト・アレグレにある補習校だそうです。」初めて聞く地名に面食らっていると、「ここです。ブラジル南部の大きな町ですよ。」と用意してくださっていた百科事典の箇所を示してくださいました。今考えると不安を解消しようと配慮してくださったのだと思います。人口百万を超える南部ブラジルの中心都市、との記載があり未知の場所への不安が、校長先生の心遣いを通して薄らいでいきました。

ブラジルからの帰国後は在籍校であるＳ小学校の勤務となりました、校長はＩ校長から、Ｋ校長に代わっていました。Ｋ校長は理科の指導に長

けていらっしゃる方で、「雑草という名の植物はありません。」とのお考えから、校庭にあった「雑草園」という名札を撤去されました。「不要な子ども、ダメな子どもはいません。」という思いからなのでしょう。このK校長はしばらくして大病を患い、入院され、教員一同で回復を願っていました。しばらくして、少しお身体の具合がよくなられたようで再び勤務されるようになりました。しかし、一歩歩くごとに痛みを覚えるのか、ゆっくりゆっくりと最寄駅から歩いておられる校長の後姿を何度か見かけることがありました。どんどん背中が大きく見える距離になりましたが、追い越すことはできません。素早く気づかれたようで「佐々木さん、お先にどうぞ。」とおっしゃいました。一礼をしながら抜いていくときの何とも言えない切なさは今でも忘れることができません。

年も変わり卒業式となりました。校長の体の状況がおもわしくないことは一目でわかりました。しかし、その日を迎えられて本当によかったと思いました。校長の式辞となり、教員席から立ち上がり、舞台に向かい、数段の階段を上る、その間の静寂は今でもはっきりと覚えています。一歩一歩ゆっくりと前に進むK校長の姿を、卒業生も保護者の方々も来賓席の方々も教職員も会場の全員が固唾をのんで見守っていました。何とかここまで頑張られた校長の思いが果たせるようにと、皆が祈るような気持ちだったと思います。卒業する子どもたち、保護者の方たちのために校長としての務めを果たそうとする強い意志がみなぎっていました。凛としたその姿は、人として校長としてそこに集う人々への最後の指導だったのかもしれません。教員や保護者の中には感動して涙する方もいました。この壮絶な教員魂に触れた私は、常に教員としての襟を正さねばと心に誓いました。

卒業式後しばらくしてお亡くなりになったK校長にかわり着任されたのはT校長でした。行動的な方で休み時間はいつも校庭で子どもたちを見守っていました。普段から教員、子どもたちとよく笑顔で話される方でした。この校長が私に管理職を目指す学びを始めるように勧めてくださっ

たのです。その頃学年主任を経て、教務主任となった私に対し、具体的に様々な助言をくださいました。これまで先生方の考え、意見を聞いたうえで話し合って決定していくことだけしか頭になかった私に、「それでは時間がいくらあっても足りませんよ。教務主任としての考えをまとめたうえで先生方に諮ってみるようにしたらいいですよ。」とご指導いただきました。リーダーとしての責任と心構え、具体的な会議の進め方などをさりげなく教えてくださったのだと思います。

そして、T 校長の異動に伴い赴任された女性の I 校長は、常にだれとでも穏やかに接する方でした。管理職試験に合格し、研修と担任、教務主任業務に多忙を極めていた私にもよく声をかけてくださいました。すべての教員の指導をいつもよく見ていてくださる方でした。私の子どもたちへの指導もよく評価してくださり、子どもたちのため、学校のためまだできることはないかと考える喜びを教えてくださいました。また、ご自身の教頭時代の経験なども話してくださり、管理職への不安が徐々に募っていく私に、その職務のやりがい、担任とは違う楽しさを伝えてくださいました。担任として歩んできた私にとって最後の校長先生でした。

今、振り返りすべての校長先生方に感謝するとともに、神さまは常に適切な時期に、適切な場所で素晴らしい校長先生方と出会わせてくださったと深く感謝しています。

４　管理職試験にむけて

教員の職種

私が担任として勤務していた当時は学校の教員は、一般教諭と教頭（副校長)、校長という三つの職種しかありませんでした。私はもともと教師になろうと思ったきっかけが山の分校での教師であり、子どもとの学校生活でしたので､生涯分校教師として生きていければよいと思っていました。

しかし、時代とともに様々な理由から教師の異動要項が整備されてきま

した。千葉県では最長７年という決まりがあり、最後まで一分校教師でいることは不可能になりました。そのうえ分校自体も減少していました。しばらくして、東京都でも同じような状況となりました。分校、特別支援学級、補習校での経験を生かして、学級担任として子どもたちの成長を支え、子どもたちと学びの楽しさを味わい合うことができるようになってくると、この仕事の楽しさと充実感が感じられ、生涯学級担任であることに問題を感じることはありませんでした。

そんな折に、突然のＴ校長から管理職試験への勧めを受け、面喰いながらも好きなように自分の歩んできた教員生活も自分だけの力ではできなかったことに気づかされました。しかし、その意義は理解できても、子どもたちの指導に100％の労力を費やした後に開かれる研修会の参加には初めの数年は、あまり身が入りませんでした。

管理職試験対策

管理職試験対策のための研修は、教員としての視野を広げるために講演から学ぶものと、実際の試験対策のために論文の添削指導をしていただくことの二種類でした。主催は校長会と自主的団体の２種類がありました。そのころの管理職試験は、定められた時間内に、出題に対する論文を書き上げるという一次試験と、個人面接の二次試験で行われていました。研修会は管理職試験における論文の作成方法が中心となり、出題に対してその場で書き上げ、次回に個別に添削指導していただくという形で進められました。勤務終了後の自主的な研修会でしたが管理職候補者は全員が当然のようにその研修会に参加しました。私も初めは何をどう書けばいいのか全く見当もつかずにいたのですが、指導していただくにつれどのように書き進めていけばいいのか見当がつくようになりました。

しかし、どのような問題になるかは全く予想できません。教育法規を暗記して、事例に当てはめて正誤を判定するといった試験内容ではありません。初めての試験当日、２時間を少し超える制限時間内に、出題に対する

自分の考えを 2,000 字程度の決められた分量で書ききることは全くできませんでした。当然のように合格はできませんでしたが、私が担任として子どもたちと学校生活を送ることに関しては、変化は何もありません。かえって日常の指導改善、充実こそが管理職研修であると考えていました。不合格に対し残念とか悔しいとかの感情は全く湧いてきませんでした。数年をそのように過ごした後に、出題に対する傾向と対策をしている自分に気づかされました。

管理職になりたい、との強い思いはありませんでした。ただ、私の後に続く若い教員たちの創造性、挑戦精神などを支えることができる立場になれるのならという自分の思いを再確認する機会が与えられてからは、一般的な体裁や、無難な内容にする書き方をやめました。出題に対して子どもたちとの多くの時間で培ってきた自分の経験、考え、思いをそのまま表現することにしました。そして、その年に合格することができました。

（3）校長試験

教頭（副校長）の経験を積む中で取り組んだ校長試験も管理職試験とまったく同じ状況でした。副校長職の魅力に目覚めた私は、このまま続けていきたいという思いが強くなってきました。そんな状態での私の校長試験も、管理職試験とまったく同じ道をたどることになったのです。不合格が続いた後、豊島区内の先輩校長に「佐々木さんはどんな学校づくりがしたいのですか。」と問われたのです。そこで、改めて校長職になることの意味を問い直し、次の論文では私が校長として作りたい学校について書き上げました。全方位に配慮できてはいない不格好な論文でした。しかし、情熱と勢いはこれまでで一番込められていたと自負しています。そして、その年校長試験に合格しました。

5　学校管理職として

（1）教頭（副校長）職の魅力

学校に一番早く来て、一番遅く帰るといわれてきた教頭（副校長）職ですが、この職種にしかない魅力も数多くありました。

①　職員室の担任

教頭（副校長）は、すべての教員に対する指導、助言が自由にできる立場にあります。学級担任が学級の子どもたちに対する指導、助言と同じような感覚で、職員室の教員の担任が教頭（副校長）であるといえるのです。

教員は教室に入ると孤独感に陥ることがあります。特に指導者として学習指導、生活指導の責任が自分にあるという考えに支配されたり、他の学級との意味のない競争意識を持ったりするとついそうなってしまう傾向が見られます。保護者からの要望などにどう応えたらいいのか、正解を探そうとして疲れてしまう教員もいます。本来は学校は学びを中心とした生活をする場であることを生活綴り方教育などから学んだ私としては、教員たちに自分で自分を縛るような考え方や指導方法ではなく、自由で闊達な心からよい教育は生まれるということに気づいてもらえるように努めました。

私は保護者と教員が異なる場所や方法であっても、子どもの幸せを願う祈りを共有していると考えていました。保護者の言葉をそのまま聞くというよりも、学校教育の専門家として自分自身の教師経験、視野の範囲で積極的に聴くことにより保護者の話の真意が理解でき、保護者の願いをきっかけにして教育活動の幅を広げることができるのです。そんな経験談を特に若い教員に話すと、少しリラックスした表情で保護者と接している様子が見受けられるようになりました。

学習に関してもすべての学年の指導に対して私の経験から伝えることができることは大きな喜びでした。そして、それは、担任時代以上に自分自身が学び続けなければならない、研修を深めなければならないということにつながります。授業改革、学校改革に取り組む先進校に出向いて学ぶ研修が最も有効であることは熟知していました。しかし教頭(副校長)の日々

の職務を考えると容易なことではありません。そこで、教師としての視野を広げようと教育書を精読し、想像力を総動員して学び続けました。幸い当時、実際の授業を対象にした「授業研究」という手法を取り入れた教育書が多く刊行されていました。担任時代には気づけなかったことも教頭（副校長）の立場だからこそ深く理解できることも多くありました。

②　保護者との広い交流

教頭（副校長）は保護者との交流を飛躍的に拡大することができる職種でした。多くの学校ではPTA活動の中心に学校代表として教頭（副校長）が加わります。PTA役員の方々は学校の全保護者のために時間を割き、行事の開催やPTA通信の作成、学校行事への協力などにわたる活動に従事してくださいます。この方々との交流は、学級担任の時には味わうことのできなかった喜びや学びを得ることができました。できるだけPTA行事にも、学校を代表して積極的に参加するようにしていました。豊島区の小学校ではPTA連合会主催の音楽会が催されていました。あくまで親睦を目的とした集いですので、練習にはなかなか参加できませんでしたが本番当日、保護者の方々と合唱を楽しんだことなども今となってはよい思い出となっています。

このように、担任ではない立場で保護者との時間を共有していくうちに、担任には話せない話を聞かせていただいたり、学校に関することでだれに話せばよいかわからなかったという方々から、話を伺うことも多くなりました。PTA会長と率直に話し合うこともできました。このような体験は分校時代や特別支援学級や補習校では当たり前のことでした。しかし、現代の学校教育ではなかなかそうもいかないところがあります。主なる原因は教員の忙しさと組織化が進んだ学校教育における役割分担のように思えます。分校も、特別支援学級も、補習校もそれなりの役割分担はありましたが、それらは固定化されたものではなく、臨機応変に変化するものでした。そこに教師としての仕事の醍醐味があることを教頭（副校長）職の中

で、改めて考えさせられました。

③　地域との交流

教頭（副校長）職の醍醐味は地域の方々との交流ができることです。公立小学校は地域の学校です。学校来賓として必ず地域の町会長、自治会長、商店会長が名を連ねます。へき地小規模校である分校教師時代にもその意識がありましたが、それ以外の学校での担任時代にはほとんどありませんでした。大学での教師教育においても、知識としては学びますが、特別な興味関心がなければ深く学ぶことはありません。しかも、それぞれの地域の独自性は一般化できるような性質のものではありません。同じ豊島区の小学校であっても、教頭（副校長）として勤務した三つの小学校における地域の在り方はそれぞれ個性的なものでした。しかし、共通しているのは地域の方々に小学校を支えようという強い思いがあることでした。

地域には学校の通学路に自動車が多く通る道路があるにもかかわらずガードレールがないことを心配され、進んで調査してくださった方々、夏休みの子どもたちの健康と生活習慣を守ろうと、ラジオ体操を地域の公園などで開催してくださった方々がいらっしゃいました。学校のためにいろいろとご尽力くださる地域の方々に、学校としても積極的に協力する姿勢を示すことは教頭（副校長）の大きな役割の一つです。子どもたちは地域の宝と断言する人生の先輩方との付き合いが深まっていくことにより、教師の視野を大いに広げられたように思います。教師とは教えるプロというよりも、学びのプロと言えるかもしれません。私は様々な方々から地域の歴史、問題、学校の歴史など一つ一つを聴かせていただき、学ばせていただきました。教えたがりの教師が、子どもたちからの学び下手になるのと同様に、地域の方々からのせっかくの宝物をいただき損ねてしまうこともあるのです。それほど、各小学校での教頭（副校長）時代、地域のたくさんの方々から学ばせていただけたことは私の教師生活の大きな財産となりました。

（2）校長職の魅力

校長として着任した学校で抱いた不安はブラジルの補習校で校長と呼ばれた日の不安と同じものでした。ある先輩校長が、校長になると後ろは断崖絶壁に立たされているように感じることがあると話されたことがあります。確かに、その重責は教頭（副校長）時代とは比べられません。教頭（副校長）時代は、どんなときも後ろに校長先生が見守っていてくださるといった安心感がありました。しかし校長の背後には誰もいません。

そこで、言葉に対する感性を敏感に働かせるように努めました。一言で人に伝わる言葉を使うように心がけ、言い換えやくどくどとした説明はしないように心がけるようになりました。毎週月曜日の全校朝礼で子どもたちに話すときも３分で話し終えるためには言葉を精選しなければなりません。月曜日の講話の準備で全校の子どもたちに理解され、納得されるような話し方と言葉の精選を最も学んだのは、校長の私のように思えます。子どもたちにも語り続けていた、「表現することが最も大きな学びの機会である。」ことを、常に強烈に味わわされたものでした。子どもたちのため、保護者・地域の方々のため、そして学校職員のために自らを変えていこうと思えることは、大きな喜びでした。このように校長職には他の職種にはない学びと気づき、喜びがありました。

①　公教育に対する理解

教師は公立学校の存在の土台が国民一人ひとりにあることの深い認識が必要です。公立学校存立の基盤は税金に依っています。国、都、そして校長時代を過ごした北区が負担する費用によって学校は成り立っていることを今さらながらに考えさせられました。公教育は直接国民のためにあり、それがひいては世界のためにあるという思いは教師の時代も考えないわけではありませんでした。しかし、担任教師の時代には具体的に足元を支えていただいている国民の方々にまでは思いが至りません。地域の方々の支

えと共に、顔の見えない日本に住むすべての方々のおかげで一つの公立小学校が経営できること、また、その方々の為に日本の未来をつくる子どもたちを学校で育てることの大切さを知ることは喜びであり、その責任の大きさを改めて実感する機会となりました。

ですから、東京都、北区など行政機関、児童相談所、地域の民生委員、児童委員、青少年育成委員会、消防団、学校ごとの父親の会、同窓会、そのほか多くの公的機関などの皆様によって支えられていることに感謝することを忘れないようにしました。一つの学校は多くの人間の集まりによって成り立っています。そこでは大小様々な問題が日々生まれます。多くは学校内で解決できるものですが、中にはそうはいかないものもあります。そんなときは様々な機関が、人々が学校の問題解決のために支えてくださいます。校長の後ろは断崖絶壁であるという責任感と覚悟は重要ですが、実際にはそこにはたくさんの助けがありました。

そのことを痛切に感じられた行事が、創立10周年ごとに行われる周年行事と言われるものです。勤務最後になった年、私の勤務校がちょうど創立10周年を迎えました。その準備のために1年前から集まってくださった方々、そして当日来校いただいた方々すべての力で、この小学校が支えられていることへの感謝を深く感じさせられました。校長となり多くの人々との出会いを通して、神さまへの感謝の祈りの幅が今まで以上に大きく広がっていきました。

② 教員研修

公立学校教員にとって異動は必須事項です。通常は定められた年数を超えて同じ学校に勤務することはできません。同時に異動は子どもたち、同僚、学校・地域から学ぶことができる最大の研修機会とも言えます。私も大幅な異動を行いながら、それぞれの地域、子どもたち、同僚、管理職からかけがえのない様々な学びをいただきました。ですから、校長として任された学校は、子どもたちの学びの場であると共に、教員にとっての大き

な研修の場となるように整えなければならないと考えていました。

私が特に留意したことは、授業研究を通して一人ひとりの教員が自分の授業実践を振り返り、改善させていくことを学校の風土としていくことでした。そのため自らの授業を見直し、他の教員の授業から学ぶことを楽しむことが、当たり前であるような学校づくりに努めました。子ども同士、教員同士、そして子ども、教員に加え保護者も共に学び合う学校の実現をめざしました。学び上手は子どもに求めるだけでなく、教員にこそ求められる資質だと考ていたからです。学びの基本は「聴く」ことです。授業の振り返りの中心は、どれだけ子どもの声を、学びの様子を聴いていたか、見ていたかを振り返ることです。その上で、すべての子どもたちの学びがどこで、どう生まれたかを見極めることです。一人ではなかなか難しいこの作業を同僚と行うことから、互いに次の授業の学びの質を高めることができるようになるのです。

そのような学校にするために私の考えを伝え、校内での授業研究会講師には授業研究を中心に研究されている先生に依頼しました。また、年に2回、全教員が授業公開を行うことにしました、校長2校目の学校では年間50回ほどの授業研究を行いました。私はその全授業を参観し、その後の協議会では授業から学んだこと、気づいたことを伝えました。校内に授業研究は教員として行い続けることが必須であるとの風土ができ上がっていきました。学ぶ教員から学ぶ子どもが育ちます。子どもたちの学びの質が高まることは、心の安定と強いつながりがあります。児童数500人を超える学校でしたが、高学年が低学年と遊ぶ和やかな光景が増していきました。開校10周年の子どもたちの活動の様子を来賓の方々が口々にほめてくださったことを勤務最後となった学校の校長として大変うれしく思いました。

③　理想の学校をめざして

一人の教師の学びの足跡、経験のすべてを総動員して理想の学校をめざして学校全体が歩み出すのです。どの側面から見ても当たり障りのない、

特徴のない学校は決して望まれている学校ではありませんでした。もちろん公教育としての制限は考えなければなりませんが、その中でできるだけ校長のカラーを出していくことが望まれていたのです。様々な校長の彩りがあってこそ、学校の進歩、改善が図られるのです。教頭（副校長）時代、5人の校長先生のもとで仕事をさせていただく中で、似ている校長先生はいらっしゃいませんでした。同じ校長職であるのに、どうしてこうも違うのだろうと思ったことも少なくありません。しかし、5人の個性豊かな校長に出会えたからこそ自分が校長になったときに、校長職とはそういうものであり、同じではないから進歩、発展があることに深く気づいたのです。

私はキリスト者教師として学校教育のめざす理想は、自分自身の学校時代の経験、聖書信仰を持って教会生活から学んだこと、そして立教大学時代に受けた薫陶、さらにさまざまな教師経験から学んだものであり、管理職となってからぶれたことはありません。それは、「一人ひとりを決して集団の中に埋没させずにその子を支え、寄り添い続けていくこと。一人ひとりはどの子も必ず成長していくということ。子どものために学校がある。」私が校長として勤務したブラジルの補習校、北区の二つの小学校の学校経営は、この信念を貫きながらどう具現化していくかということに尽きます。子どもたちには月曜朝礼を通して、教職員には学校経営計画、月ごとの職員会議でそれを語り続けました。

教員が毎週提出する週指導計画は私が担任しているときにしていた日記指導の延長でした。言葉少なに必要事項だけを記載して提出する教員にこそ、『倍返し』でコメントを書きました。一週間の担任、専科、校務分掌などの仕事に関する感謝、その教員の指導で成長する子どもたちの様子を具体的に書くように心がけました。それらを繰り返していくことで、教員の記載も増えていきました。聞いてもらえる人には、語ってみたくなるのです。それはキリスト者の祈りとまったく同じであり、公立学校教師生活の最後まで私はこれを続けました。

６　終わりに

こうして、北区のＮ小学校教諭から始まった私の公立小学校の教員としての歩みは、様々な経験をさせていただきながら、ぐるっと一回りして北区のＫ小学校校長として定年退職を迎えるまで続けることができました。紙幅の関係で出会った多くの子どもたち、保護者・地域の皆様、同僚の教員の皆様、管理職の皆様、行政の皆様から学ばせていただいたことすべてを記すことができませんでした。ここに深い感謝と共にお詫び申し上げます。

（立教小学校校長・JICE 所員）